



文
 第
 四
 覺
 書
 113



114
A 4424

第四卷書



大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

台詞曰威權と東の二逞之人と欲するもの
必其如北極の如く解るる其の意は
之を以て居るものも猶も其の如く
若くは抑へて居るものも抑へて居るもの
一物も十分満ちる所を以て其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く

大正十一年四月

有せざるもの詞物ハ有るさりとす然る兵を回し
之を謀せり今却て支那に於て十の九は詞物に
了

予の別代を載せしむ久ピスカドルスモ家と港あり
唯其良港ありのこ何んは此福を以て鍵なり
廈門は是れ且諸産あり富なる香港に比して凡
南方西要之地なり其産物も品々甚多材木
諸種穀物も亦麻文炭ピトリル油硫黄煙

草砂糖塩芥子他人多く要用し諸品泛濫す
此利便あり因にピスカドルスを支那南海の第一
要所と云ふなり

先年身各國にて東方の船と稱する土耳其は種
論の是るもの英魯も亦國君あり一戦を起す
魯國も亦魯王を回營となすこと六の益あり
善魯生も香港に於てせんは拒まざるべし
魯西無の強大は潜る儘て印度に向ひ次第に進ん

多旅人々来と出居るも期に近りきたりキリニヤニ
戦之報復ヲ一軍之思ハナリ

蓋海軍神速と海軍を養せも英の高船と東洋
より追放する事容易シキ

今各國と清國と戦を起さる能ハシ戦之端を
開之理なき故ナリ保一北京と清帝と海軍所
時或ハ報復之根柢ナリ

以清帝臨北京と起して海軍を北と起し方して

日本北系と海軍を起して還清帝を起して是を
海軍の根柢ナリ一此方略を以てナリ
又ハ兵力を以て海軍を起して一

西より國々日本此海軍を起して海軍を起して
海軍一故の事とナリ日本ハ東の方之略ハ是を
英係ナリ日本ハ此海軍を起して英
佛兩國ハ之を起す事とナリ一其海軍日本を
有る英佛を起す國ハ此海軍を起す事

シテハハナリ

魯西無ハ此路を善魯西を降して他人に取らる
 好まざる一の何れハ此路を得獲してハホッセルト
 江に身取就衣移ちて善魯西を降して他人に取らる
 日本是を取らざる悦ばざる安心す一日本此
 路を取らざる十分の理有りて他國に取らざるを
 悦之と善魯西に好まざるを悦むことを能ま
 ざるハナリ

日本より支那に向て此路を日本に與へんことを求メ
 勸むるハ支那政府に好まざる所なりと云
 甚多難きを云ふは、一、人を好むこと、支那政府に
 支那の爲に、一、諸条を考へ、日本ハ支那に
 向つて平和の志を存するを知へ、一、加ふる、諸事
 論より各國との平和一と此路を日本に彼國人が
 求むる此路ハ割據せし彼人の此道途の要
 地、割據せしよりハ友國とする日本ハ與ふる支

那の為ノ寧ろ之故一々一をま柳そ自ら
此此と守衛するの力阿基ハ之増大ことば多きと
其の海をさする一か之又海をさると好ましく
るなり

由他一國之為ノ要用なるハ身体ノ人の為メ
要用なるもの一一部を捨ハハ天性と健康
随々換て思ふこと一々一に地理の必ふ志むる所
を以て海するもの解多海藍湖のあきハ日

幸帝國の内地なる事 明の事

日本ハ半島なり。外洋ニ接有らるを得。之ノ黄
海ヲ勢と逞とす。今ノ日本海ノ望
ハ朝鮮ニ向岸ニあり。全ク之を我物とす。こ
レ又又喜西亞或ハ他ノ國ニ来。向岸ニ接有
ル。日本其ノ為メ。常ニ煩とす。事少ク。凡ク
土耳其ノ大國。律ノ水。傷とす。お接ハ常
ニ要喝を更々契と家とす。お人なり。

朝鮮の如く貿易を爲すに其地位大に優り其
其通商にあり、吾國を以て其本國と通し之を
共に海面とて海陸軍の爲す必要なき地
なり北海に陸軍を以て防禦かゝるに宜し
細立其第一に要所なり

日本近年大に開け航海と海陸軍の訓練を
要し盛んに行はれ西征を爲す所既
之より此に朝鮮を併せ有さし之を諸國之權

を及ぶ事自在と極む

日本、朝鮮、澎湖、臺灣の諸島を併せ、彼
のを極倒せんとするの支那を極き、尚多かるの
勢を中しり

千五百年代、歐洲人文勃たつ、其の道と其の
其黨、人の若し其社を結ひ、基利宗教を以て法
律と製し、風俗を改めたり、其等、はてして日耳曼
のキルトとて、人々の社を働かし、之を結ぶ

此が結社として牆壁を以て圍繞せしむる
一地に居住せしむることをシテイローラフエーチと稱す
此等の人の目的は自由と理を講じ人皆一
般の利益を成る事なり我々のまゝ
此黨の人衆大に集り其勢又強大にして終に
諸方に及ぶ一統前此の道ありし今日亦人
文の域をこゝるあり

朝鮮 臺灣の各地日本の物とすなりハ亞細

亞の諸方より人民の繁盛 注来稿 積聚せしむる誠
圃の乾涸注来しと休止なきを久なる一
ハ人民は事なきより知るこゝろを知らず見ざる
を以て之より決りて進んことを種を植へ
葉芽を生じ終に一株の茂樹とならば久
后来日亦本邦に及ぶに朝鮮を以て其
亞細亞海中に於て彼ニテイローラフエーチの歌羅
バ海に在りし如くなり

吾國人民の絶えず交際をせしむる因つて其化世又
従つて其公私の増一交社と結ぶ事の事務の
十分なりしも其手は果て空しくし確たる所
なり之をサ業と燃し其の所存の所始は
之を煖き終に煖き盡し其の所

為に無細重濁と云ふ殊に支那帝國を以て
之を以て日本に比し地勢の險峻を以て其
輪形を以て東に比し其の所存の所

の帝國を以て直隸漢口を以て其海を以て
を圍繞したるは此の年より其の人民は統
一して其の度毎に新思奇行を推し其故
土を開拓を以て結縛絶つる時其終に全土
文明の域となりし各國より一國を開くを以て
して其力を借し其を得る今其の言の如く和
平の交情を以て之を開くを天理に違はざる人情
に情あり其懸隔豈に千萬の如くも未だ

大正 官
時を以てハ智者を以て之を先知らんべし
此の維新日本ヲ斯久の如く刑化の政を施し
彼の帝國に於てハ其の如く沿革を起し其後
我皇海にいはゆる革新変化を果さんと西帝
國を全備し唯一帝の統御ヲ得ん之思想す
こゝに於て物と云ふ新義を以て東帝ハ彼新帝國の
首都とすんト即今支那の舊俗陋風を以て
其ハ或ハ陽意の世なりといふん予是之を厭

しハ電報アリ鐵道海軍あり首都も清
の四境にもん事僅に之を以て是とす
日本ハ斯の如き大略俾望し存るハ今
姑ク先ハ朝鮮を定メ臺灣を略すハ此の如
き是の如きハ諸侯の執士位を解るは等
の戦士者ハ職を離るる時ハ多し
事を起して政府の煩となる物也此等を驅
逐す後ハ用ひて政府の煩ハ去る之却て國の

榮より皇海の所を養を煥發するより入る
なり

皇國の所を養を盛に振るべきに貿易通商の道
大に起しん之獨り皇國のこころに其益偏大
外國より及ぶ之を以て待たざるは是故に
外國の各平和満足の心を以て傍觀日本
より前年の結果を充分に遂げし事其類を
踏む希望するは

